

## 10 フォローする……叱ったあとで

子どものしたことに強い怒りを感じてきつく言ってしまうことがあります。また、相手が反抗的な子どもや不登校傾向など支援が必要な子どもの場合には、こちらも言葉を選びますが、素直であまり気を遣わない子どもには、けつこう率直に言ってしまうことはありませんか。しかし、彼らもやはり、傷つきます。叱られることで多少傷つくことはやむを得ないことです。傷つくことで、その回復過程で強さが育つことは、前に述べたとおりです。

しかし、傷つけることが叱る目的ではありません。子どもが適切な方向に向かって歩き出す気力さえ奪ってしまつては、本来の叱る目的を達成できません。叱りつ放しにしておくと、「見捨てられた」と受け取ってしまう子どももいます。

子どもは教師に向かつて「くそババア」と言ったり、「前の先生のほうがよかった」「俺のことわかったふりするな！」などと、けつこうキツイことを言うこともあります。みんな教師に関心を向けているからだとも言えます。みんな教師に愛されたいと思つています。でも、みんながみんな素直にそれを表現できないのです。

だから、どんなに叱っても「嫌っている」「見捨てられた」などのメッセージを与えないようにしたいものです。そのためには、

### フォローすることが大事

なのです。

叱ったあとに適切にフォローを入れることで、子どもは愛情に基づいて叱ったことを理解するでしょう。また、それがわかるようにフォローすることが大事です。私の同僚の女性教師で、けっこう厳しい物言いをする方がいました。

「あなたたちのやっつけていることが信じられない。よくそんなことできるね！」

彼女が子どもを叱っているところを何度か見ましたが、大柄な彼女が激しく言う、かなりの迫力があります。しかし、高学年を担当することの多い彼女ですが、子どもから反発を食らって学級経営が危機に瀕したと聞いたことは一度もありませんでした。そう、子どもからとても支持されていたのです。あるとき、その秘密の一端がわかりました。

彼女が学級の子どもにお説教をしているところに偶然通りかかりました。例によってけっこう激しい口調で叱っていました。しかし、そのあとでこんな言葉が聞こえてきました。

「私は、あなたたちが憎くて言っているんじゃない。心配なんだよ。あなたたちのことを大切に思わなかったらここまで言わない。あなたたちは大切な人たちのな」

三〇人以上いる六年生が、真剣に彼女の言葉を受け取っていました。そのあとで彼女の学年主任に会ったのでその話をする、「そうなのよ、彼女は叱ったあとのフォローが本当に上手なの」とほめていました。彼女は、フォローの達人だったのです。

このように「叱った真意を伝える」というフォローもあります。いろいろなフォローがあります。いくつか紹介します。

### (1) 切り替える

一度怒り出すと長々と叱り続ける教師がいますが、長いお説教は誰だって嫌です。また、言葉は短くても、ずっと怒った表情をしている人がいます。言葉はていねいでも、口調や態度や表情に怒りがこもっていたら、怒っているのと同じです。叱るのが上手な先生は、短く叱ります。そして終わると、普通の表情をして授業をしたり話をしたりします。

もし、どうしても切り替えることができなかつたら、子どもに、

「先生は、まだ、ちょっと気分が治まらないから、五分だけ時間をちょうだい。はい、その間読書して」

と、インターバルを申し出てもいいでしょう。怒ってはダメだとは言いません。しかし、怒りを引きずって叱る時間が長くなるのは賛成できません。

## (2) 限定する

集団の前で特定の子どもを叱ったときには、特にこの技術が大事です。

授業中に課題に取り組まないで遊んでいた子どもが数人いたとします。そのときに、全体の前でその子どもを叱りました。その子どもが叱られることは当然のことですが、そこには同時に、真面目に課題に取り組んでいた子どももいるわけです。全体の前で叱るということは、そうした子どもをも一緒に叱り、不快感を与えてしまうことです。全体の前で叱ったのならば、そうした子どもへの配慮を忘れないようにしたいものです。

例えばこんなふうに言います。

「いま、○○君たちを叱ったけど、多くのみんなはちゃんとやってくれていたね、うれしいです。また、先生が叱っている間に静かに協力してくれてありがとう」

このような誠実な教師の姿が、叱ることの正当性を高めると同時に、教師への信頼感をつくっていきます。

## (3) あやまる

言いすぎや行きすぎた表現は、非は非として認めてあやまるべきです。

「なつきは、言いすぎたね。ごめんね」

ここはあまり感情的にならずに、短くスパッとあやまります。間違えないでほしいのは、勘違いで叱った場合は別ですが、子どもに非があつて、意図的に叱った場合は、叱ったことをあやまっては

けません。「叱ってごめんね」なんて言ったら、「だったらさっきのは何だったのか」ということになります。詫げるなら表現の仕方を間違えたことを詫げるべきです。「ごめんなさい」と素直に言える教師の前では、子どもも素直に「ごめんなさい」と言えるのではないのでしょうか。

#### (4) 逃げ道をつくる

友達に意地悪をしてしまった、友達の作品を壊してしまった、みんなが頑張っているときに非協力的な態度をした、こういうことが立て続けに起こると、子どもを責めたくなくなります。「なぜ、そういうことをしたのか」「どうして、そういうことをするのか」「何度も約束したじゃないか」などと、子どもを追い詰めてしまうこともあるかと思えます。

しかし、子どもは自分がどうしてそんなことをしてしまったかうまく説明できなかつたり、子ども自身にもその理由がよくわからないことも多々あります。感覚的にやってしまうこともあるからです。それを理詰めで責められては、それを反省するよりも、混乱や責め立てる教師への反発心を強めるだけです。

ある程度叱ったら、「今回は失敗しちゃったんだね」「間違えたのかな」と「逃げ道」をつくってやることも必要です。すると子どもは、うん、とうなずきます。そうしたら、「そうか、間違えたのか。今度は間違えないようにしようね」と言って、終わりにします。

このような指導は甘いですか。  
でも、また間違えたら、また叱ればいいと思います。すべてのことを一度で片付けようと思わなく

てもいいのではないでしょうか。良好な関係性があつたら、指導のチャンスはいくらでも訪れます。しかし、徹底的にやり込めてしまつて関係性が悪化したら、次に指導するとき私たちの言葉は入らなくなりません。関係性悪化のデメリットは計り知れません。

(5) さりげなく

叱ることがうまく機能しないのは、もちろん教師の叱り方の問題もありますが、子どもの受け取り方の問題も少なくないと考えています。つまり叱られ下手なのです。

叱られる経験の不足なのでしょうか、その現実を受け止めることがうまくできない子どももいるようです。受け止められなくて、自分を守るために、過度に言い訳をしたり虚勢を張ったり、時には反抗したりします。上手に叱られるようにするためには、叱られても相手との関係が断ち切れることはないと言わざるを得ない経験が必要です。

そのためには、叱つたあとに、こちらがいつまでも叱つたことにこだわっていないことをわからせてあげたいものです。つまり、原則として、

**叱りっぱなしで家に帰さない**

といった配慮をします。低学年なら、叱つたあとにスキンシップをする。ある程度以上の年齢ならば、叱つたあとに、別な話題でおしゃべりをする。また、叱つたあとには笑顔を見せる。こうしたことを

さり気なくしておくことが、叱られ下手の子どもが正しい方向に歩み出すための意欲を喚起する一助になるでしょう。

ただし、叱ったあとのフォローの意図が見えすぎると、叱ることの意味がなくなってしまう。「どうせ、あとで先生はやさしくしてくれる」というような認識を持たせてはいけません。あくまでもさり気なく実施することが大事です。

★ 自信を引き出す教師への道 ⑳

- ① 子どもを叱りつ放して家に帰したことはありませんか。
- ② そのときどんなフォローをすればよかったですか。また、次に子どもを叱ったときにどんなフォローをしようと思いますか。